

- 5) 小型槍先形尖頭器の位置づけについては、所属時期を正確に認定するまでに至っていない。あくまでも可能性の高いと考えられる時期だという位置づけにとどまる。
  - 6) どの段階での共伴なのかについては正確に把握できない。石鏸や有溝砥石には奈良県北野ウチカタビロ遺跡や桐山和田遺跡に類似するものが認められる。
  - 7) 大宮・宮崎遺跡例のように局部磨製石斧の出土・採集例も知られるようになってきた。
- 木村剛朗『大宮・宮崎遺跡I（続編）』高知県幡多郡西土佐村教育委員会 2000年
- 8) たとえば、Fig.161-902の頁岩製の搔器（ラウンドスクレイパー）など、草創期に特徴的な遺物との御指摘を頂いた資料も何点がある。

#### 4. 縄文時代早期～南四国の縄文時代早期土器編年～

縄文時代草創期以上に岩陰が積極的に利用されたと考えられるのが、縄文時代早期である。<sup>(1)</sup> 早期として認定し得た土器は、破片から時期を判別できた土器の70%以上を占める。纖維圧痕を持ち器壁の厚い纖維土器など破片から特徴をつかみやすい土器の多いこともあるが、縄文時代を通じて早期に最もこの岩陰が多く利用されたのは間違いない<sup>(2)</sup>。

縄文時代早期とされてきた遺跡の大半は、特徴的な石器の存在（鍬形鏸やトロトロ石器など石鏸の形態に依ることが多い。）によって早期とされてきた遺跡である。早期を特徴づけるとされる石器に対して土器の出土は少なく、出土する遺跡も全体の3分の2ほどである<sup>(4)</sup>。小破片も含めると早期だと判定可能な土器が182点出土した奥谷南遺跡は、高知県内の早期遺跡としては比較的まとまった資料内容を持つといえる。この出土量に匹敵する遺跡としては、土佐山田町飼古屋岩陰遺跡<sup>(5)</sup> 香北町刈谷ヶ野遺跡（旧名・太郎丸遺跡）<sup>(6)</sup>、十和村十川駄場崎遺跡<sup>(7)</sup>などを挙げ得るにすぎない。最近調査された土佐山田町開キ丸遺跡は、押型文土器を中心とした時期の遺跡で、2時期に分層可能であり、遺構（集石遺構）も伴うなど調査成果が期待される。

奥谷南遺跡の早期土器は6類に分類される。分類基準など詳細は第IV章調査の成果に記したとおりである。1類が押型文土器で押型文の特徴により1類A、1類B、1類C、1類Dの4つに分類される。2類と3類は南九州系の土器で、2類が天道ヶ尾式土器、3類が平桟式土器、何れも高知県では初めての検出例となる。4類が纖維土器、5類が無文土器、6類が条痕文土器である。完形品に近いものや土器全体の4分の1を超えるような一定の大きさを持つ個体はなく、せいぜい10～20cm四方の破片をもとにした分類であり、位置付けである。

これらの土器の所属時期については、在地の土器の様相が今一つ確実に把握しきれないため、周辺地域との比較での編年的位置付けを行なった。早期土器の資料が増える度に、同様な資料操作による県内の早期土器編年は、岡本健児・木村剛朗・森田尚宏・前田光雄などによって行なわれており、今回は奥谷南遺跡出土の縄文早期土器をこれら従来の早期土器編年との対応関係も示してみたい。なお、周辺地域との比較については、層位的な出土による一地域内での先後関係に裏づけられた研究の蓄積がある帝釈峡遺跡群、押型文土器について全国的な視野でまとめられた縄文土器大観を参考にした<sup>(8)</sup>。

## 縄文早期土器編年（南四国を中心とする）

### ①『日本の洞穴遺跡』

(1) 江坂輝弥・岡本健児他「上黒岩岩陰」

(2) 岡本健児・片岡鷹介他「不動ヶ岩屋洞穴」

「不動ヶ岩屋II式文化－黄島式に併行する。これに對して城ノ台洞穴遺跡出土の大型山形押型文は2段階ほど新しい。」

②-1 岡本健児『高知県史 考古編』・『高知県の考古学』 1960年代までの状況をまとめる。

②岡本健児『長徳寺址発掘調査報告書』 1977年

不動ヶ岩屋II式→長徳寺式→城ノ台式  
(葛島式→高山寺式→穂谷式)

③岡本健児編年

-高知県出土の縄文早期土器-『高知の研究1』1983年  
葛島式土器→大型楕円押型文(高山寺式)→大型山形  
押型文(穂谷式)→纖維土器(十川駄場崎遺跡出土)→  
前期初頭の土器(羽島下層+轟B-県西部の様相)

④森田尚宏『飼古屋岩陰』1985年

押型文土器

I類山形文-山形の振幅大・横位に施文

II類山形文-山形の振幅小・横位に施文

III類楕円押型文(小型)

IV類楕円押型文(大型)

V類格子目文

VI類爪形に類似する押型文-ネガティブな押型文-

厚手無文土器

VII類器厚12mm指頭調整痕あり

VIII類器厚15mm断面に纖維痕

⑤木村剛朗編年 四国西南部の遺跡<sup>(9)</sup>を中心とした編年観『四万十川流域の縄文文化研究』1987年  
早期中葉→早期後半→早期末葉(厚手無文土器・葛島式土器・不動ヶ岩屋II式→城ノ台式→纖維土器)  
他に『十和村史』で示された編年がある。

⑥前田光雄『十川駄場崎遺跡-第5次発掘調査-』1996年  
隆起線文土器(草創期前半から中葉)→(不明・空白-  
草創期後半・無文?)→無文土器・条痕文土器(早期前半)→押型文土器(早期前半から中葉)→大型押  
型文土器・条痕文土器・無文土器(早期中葉から後半)→纖維条痕文土器・纖維無文土器・条痕文土器  
(早期後半)  
十川駄場崎の層位的出土例の積み重ねをもとに提出

された編年試案。層位的出土例に基づき論理的に並べる。資料的制約のため限界のあることが明示されている。

### ⑦可児道宏「押型文系土器様式」『縄文土器大観』

1989年 押型文期に限った全国的な編年観のまとめ

第I様式 草創期の多縄文系の土器の最後に位置する表裏縄文の土器に後続するか一部併行→最古の押型文土器

縦位の密接施文を特徴とし、間に無文帯を残さない。分布の中心は東海地方。周辺は撫糸文系土器様式圏だが、伴出例はほとんどない。

第II様式 押型文土器の周辺部への波及→地域性の強さ

中部高地→沢式(異方向の帶状施文)・樋沢式(異方向の帶状施文と密接施文) 楕円文の出現

楕円文には異方向の帶状施文が少ない・沢式とは異なるあり方→技術的問題・時期的問題

近畿地方に大川式・神宮寺式が分布、次の第III様式に至っても同様のネガティブな楕円文に象徴される文様に固執した。大川・神宮寺式はこの段階で、東海地方の土器群の影響を受けて成立したものである。

第III様式 第II様式の影響を引き継ぐ。新たに全面が横位施文で飾られる土器出現。

中部高地→細久保式の成立

横位施文→帶状施文と密接施文

細久保式(横位の密接施文-第I様式の特徴の一つ)

→黄島式(近畿以西中四国)・早水台式(九州)の成立  
・・特徴-文様の齊一性が強く、土器組成の中に無文土器を多く含む→無文土器の多さは押型文土器の波及以前の土器様相を示している。すなわち、近畿地方より西の地方への押型文土器の波及がこの時期に始まったとされる。

第IV様式 東北地方で押型文土器がなくなる(III様式後半)。押型文土器の分布圏は関東地方以西だけとなる。

土器の地域性稀薄(齊一性強し、広域に分布)

齊一性の強い土器→細久保式・大川式・神宮寺式・黄島式の分布域-関東から中四国にかけて→高山寺式が分布

九州では早水台式が田村式に。しかし、田村式と高山寺式は同じ型式内容→すなわち、関東から九州に

かけての極めて広い地域が、同じ土器分布圏となる。  
第V様式 九州地方を除いてこの時期の土器を出土する遺跡は激減。押型文系土器様式は一斉に終末を迎える。

相木式・長野県柄原岩陰  
穂谷式・大阪府枚方市穂谷遺跡  
九州・田村式→ヤトコロ式→手向山式

⑧潮見浩 第三部第一章「縄文土器の編年」『帝釈峠遺跡群』吉備考古学ライブラリー1999年

帝釈峠遺跡群の層位的出土例の比較検討により、早期の編年が明らかになっている。

無文土器 I → 無文土器 II → 刺突文土器 → 条痕文土器 → 押型文土器 I (二枚貝条痕と山形文) → 押型文土器 II (ネガティブ押型文・山形文+矩形押型文) → 押型文土器 III (黄島式併行・ここにいわゆる厚手無文土器・葛島式土器が伴うとされる。) → 押型文土器 IV (高山寺式併行) → 押型文土器 V (穂谷式・手向山式併行) → 織維土器 I → 織維土器 II → 織維土器 III → 織維土器 IV → 羽島下層式

Tab. 37 縄文時代早期の南四国土器編年と奥谷南遺跡出土資料の位置付け

時 期	広域分布土器様式(押型文系土器様式) 『縄文土器大観』	南四国の主な早 期 遺 跡	奥谷南遺跡	十川駄場崎 遺 跡	高知の研究 ・1983岡本	山間部・長徳寺址	飼古屋岩陰	南九州	帝釈峠遺跡群	近畿地方
早期初頭			+						無文土器 I 無文土器 II	
早期前半	押型文土器 第I様式・中部日本(東海)で成立	十川駄場崎 遺跡	+	無文土器・条 痕文土器					刺突文土器	
			+						条痕文土器	
			+						押型文土器 I	大川・神宮寺式
	押型文土器 第II様式・近畿以西に押 型文出現	(10) 町田堰東遺跡・ 飼古屋岩陰	早期1類A				飼古屋 I式		押型文土器 II	
早期中葉	押型文土器 第III様式・中 四国への波 及強まる	不動ヶ岩屋洞 穴・十川駄場 崎遺跡・飼古 屋岩陰・開キ丸 遺跡・楠山遺 跡	+	押型文土器	葛島式 <sup>(11)</sup>	不動ヶ岩屋II式	飼古屋 II式	早水台式	押型文土器 III 黄島式	
早期後半	押型文土器 第IV様式・齊 一性強し	長徳寺址遺 跡・十川駄場 崎遺跡・飼古 屋岩陰	早期1類B	大型押型文 土器・条痕文 土器・無文土 器	大型押型文	長徳寺式	飼古屋 III式?	田村式(高山 寺式と同じ押 型文)	押型文土器 IV 高山寺式	
		城ノ台洞穴・ 十川駄場崎 遺跡・大宮宮 崎遺跡	早期1類C・D		大型山形押型文	城ノ台式		手向山式	押型文土器 V 穂谷式	
		十川駄場崎 遺跡	早期2類					天道ヶ尾式	織維土器 I 石山貝塚 出土資料	
早期末			早期3類	織維土器				塞ノ神・平柄式	織維土器 II 石山貝塚 出土資料	
									織維土器 III 石山貝塚 出土資料	

これらの土器は、基本的に同一地域内での層位関係に基づくクロスチェックを経た資料であり、資料の少ない中四国の早期土器編年上有効な資料である。奥谷南遺跡出土の早期土器を帝釈峠遺跡群の編年に当てはめると、奥谷南早期1類Aが押型文土器Ⅱに、早期1類Bが押型文土器Ⅳに、早期1類C・早期1類Dが押型文土器Vに併行する土器群である。また、奥谷南遺跡において纖維痕の混入が顕著で器厚11~15mm前後と厚手無文土器（纖維土器）と称すべき比較的厚手の土器は、纖維を顕著に含む土器が早期後半に登場するという十川駄場崎遺跡の層位的出土例に従えば、早期後半の土器となる。

また、口縁が短く外反する土器（早期5類・無文土器）は、口縁形状が不明で条痕地をもって早期とした土器（早期6類・条痕文土器）とともに現段階では位置付けが困難な土器である。十川駄場崎遺跡の層位的出土例からは、条痕文土器が早期前半から後半まで存在する可能性が示されている。ただし、早期5類については、口縁形状が特徴的であることから、将来的には時期特定の可能な資料となろう。

当遺跡で出土した早期土器の中で、注目されるのは早期2類と早期3類とした南九州系の土器である。出土点数は決して多くなく、仮に複数個体の存在を想定し得たとしても数個体程度に過ぎない。早期2類は南九州の天道ヶ尾式土器、早期3類は同じく平椿式土器である<sup>(12)</sup>

早期2類（天道ヶ尾式土器）は「刻み目を持つ隆帯を貼付し、沈線による施文を行なう。沈線の中には押し引き刺突が認められ、押し引き刺突のある沈線とない沈線が交互に現出する部分も在る。」と表現できる土器で、手向山式土器と平椿式土器をつなぐ編年的空白を埋める土器である。早期3類（平椿式土器）は、「頸部で稜をなして外へ開きながら屈曲、口縁部が肥厚し、肥厚部外面は縄文地に横位の結節縄文を施文、頸部には無地に口縁部肥厚帶同様の横位の結節縄文を施す」土器という表現ができる。

この時期、南九州系の土器、すなわち塞ノ神・平椿式土器様式の土器が出土した例として、四

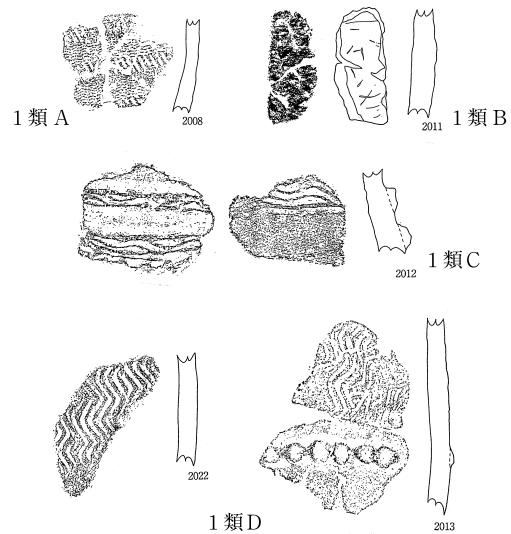


Fig. 258 奥谷南遺跡出土押型文土器



鹿児島県 柏原遺跡出土土器

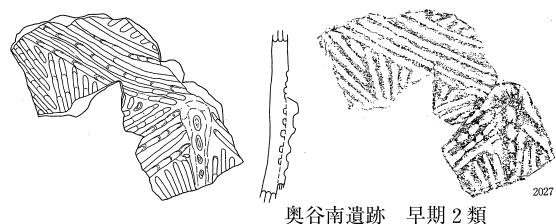


Fig. 259 奥谷南遺跡出土天道ヶ尾式土器と鹿児島県出土土器との比較

国島内では、愛媛県池ノ岡遺跡出土の塞ノ神式土器の例が知られている。塞ノ神・平椿式土器様式の土器出土例としては、本州に日本海側では鳥取県、瀬戸内では兵庫県などで類例が確認されている<sup>(13)</sup>。天道ヶ尾式土器は、手向山式土器と平椿式土器の間をスムーズに繋ぎ、編年的空白を埋める土器として注目された土器である。先述の帝釈峠遺跡群では押型文土器Vとされる土器の中に、天道ヶ尾式土器と同様の沈線が共存する土器が確認できる<sup>(14)</sup>。この事実は押型文土器の最終末に天道ヶ尾式土器あるいはそれに先行する沈線を有する土器が併行関係をもって存在したことを端的に示すものである。

奥谷南遺跡早期2類土器及び3類土器が搬入品だとすれば早期後半期の在地土器の様相はいかなるものであったのか。従来の南四国の早期後半期の様相は十川駄場崎遺跡出土資料をもって語られている(1983岡本・1996前田)。早期後半の土器としては纖維無文土器・纖維条痕文土器・条痕文土器の存在が知られている。纖維痕が顕著な土器が、押型文土器を境界としてその後に展開する様相が南四国の様相なら、早期4類・5類・6類が当該期(早期後半)の押型文土器に後続する在地土器の可能性をもっている。

高知平野中央部で早期後半の南九州系の土器が確認されたという事実は、日本海側の鳥取・兵庫など西日本各地で近年確認されつつある当該期の土器同様、重要な情報をもたらした。四国太平洋岸にも南九州から複数の時期に亘って人々の移動(もしくは土器の移動)が確認されたことで、今後、早期後半の資料検討時には搬入品の有無を確認する視点が必須となろう。

## 註

- 1) 岩陰周辺の縄文土器分布域は石鎚の分布域とほぼ重なり、細石刃関連遺物とは異なる分布状況を示す。落磐等による岩陰の地形改変が想定される。
- 2) 南四国の洞穴・岩陰遺跡にも不動ヶ岩屋洞穴・城ノ台洞穴・坂本大平岩陰など早期に利用された例が多い。  
山下英雄「坂本大平岩陰遺跡」『池川町の遺跡』池川町教育委員会 1993年
- 3) 早期の石器については、石材という観点から前田光雄により指摘されている。なお、サヌカイトが草創期の段階で流入し始めることについては、奥谷南遺跡出土遺物から述べたことがある。しかし、旧石器時代・ナイフ形石器文化期の角錐状石器の例を持ち出すまでもなく、少量ながら奥谷南遺跡Ⅷ層以下の層にも見出すことができ、客体的な存在として搬入されている状況は認めなければならない。草創期までは在地石材たるチャートの中に僅少なサヌカイトが見出せるのみ、あるいはほとんど存在しない旧石器時代と同様のあり方だったと想定される。やはり、サヌカイトの搬入・石材としての利用が本格的に開始される時期は縄文時代早期であろう。  
前田光雄「南四国の石器相」『大宮宮崎遺跡Ⅱ』高知県幡多郡西土佐村教育委員会 1998年  
松村信博-1997年6月13日付高知新聞学芸欄「山の中の縄文草創期~第8回中・四国縄文研究会に寄せて~」

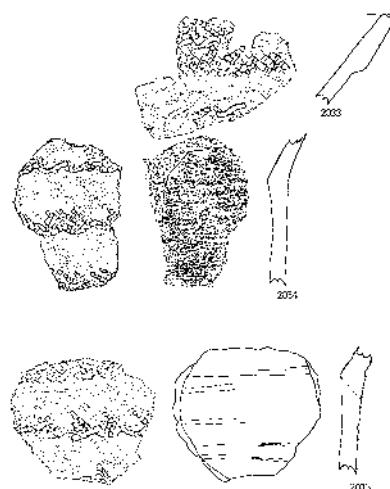


Fig. 260 奥谷南遺跡出土 平椿式土器  
(早期 3 類)

- 4) Tab.4 高知県の縄文時代早期の遺跡一覧 (P.19) 参照。
- 5) 森田尚宏『飼古屋岩陰遺跡調査報告書』日本道路公団・高知県教育委員会 1983年
- 6) 香北町刈谷ヶ野遺跡（旧名太郎丸遺跡）からは、おそらく南四国で最も多くの押型文土器が出土している。物部川段丘上の調査であり、試掘調査のため、現段階では未報告ではあるが、楕円押型文、山形押型文、纖維圧痕を持つ厚手無文土器など出土点数は200点を超えていた。
- 門脇隆『太郎丸遺跡試掘調査概要報告』1997年
- 7) 前田光雄『十川駄場崎遺跡-第5次発掘調査-』高知県幡多郡十和村教育委員会 1996年
- 8) これらの文献以外に、『縄文早期を考える-押型文文化の諸問題-』(帝塚山考古学研究所 1988年)も参考にさせていただいた。
- 9) 高知県西部の縄文時代遺跡と高知県中・東部とを比較すると、明らかに西部に遺跡が偏在する傾向を読み取ることができる。早期においても同様である。これは、西部の遺跡密度が高かったわけではなく、河岸段丘の発達した四万十川など残存状況の良さと情熱を持って日常的な踏査など遺跡の探求を行う研究者の数の差に由来すると考えられる。
- 西部の遺跡については、木村剛朗『四万十川流域の縄文文化研究』『四国西南沿海部の先史文化』に詳細にまとめられている。両書ともに四国西南部縄文文化研究のバイブルと称すべき素晴らしい研究書である。
- 10) 遺跡分布調査の際に物部川中下流域の段丘上でネガティブな楕円押型文を持つ押型文土器が確認されている。  
(未報告資料-野市町田堰東遺跡・出原恵三氏の御教示による。)
- 11) 菦島土器については黄島式併行期の厚手無文土器という捉え方が一般的である。小鳴鳥貝塚出土押型文土器は数時期にまたがる資料を含んでおり、近年の出土資料の増加によって、この厚手無文土器が押型文土器と共に伴しないこと、つまり異なる時期の資料である可能性が指摘されている。
- 押型文土器と無文土器の共伴については、近年疑義が示され、北鉄輪遺跡出土資料をもとに押型文期には少なくとも九州では在地の土器が伴うことは、ほとんどないという事実が示されている。これは、中四国、近畿地方の遺跡にもいえることであり、押型文期の良好な一括資料には、無文土器等従来大量に伴うとされてきた土器の出土が認められないという。(すなわち、黄島式の段階に伴う厚手無文土器-鳶島式土器は時期差のある資料であることが明らかになりつつある。)
- 永野康洋・遠部慎・滋賀智史「別府市における縄文時代早期の様相-北鉄輪遺跡試掘調査概要を中心に」『おおいた考古 第12集』大分県考古学会 1999年
- 12) 天道ヶ尾式土器については、型式設定された熊本には類似する例がないという御指摘を受けたが、鹿児島から出土する例に類似する例があったためFig.259として掲載した。天道ヶ尾式土器の評価は、当初の設定内容が見直され、編年的位置づけも検討されている。宮崎県では、同じ階梯の土器に妙見式土器という名称を使用する。
- ①『丹波遺跡・西ノ原B遺跡』2001年3月 鹿児島県埋蔵文化財センター P.94 第61図 350  
②『九州縄文土器編年の諸問題-早期後半土器編年の現状と課題-』九州縄文研究会 1998年
- 13) 大久保浩二「兵庫県神鍋遺跡採集の塞ノ神・平椿式土器-和田長治氏コレクションから-」『南九州縄文通信』No.12 1998年
- 14) 潮見浩『帝釈峠遺跡群』吉備考古学ライブラリー 1999年
- 15) 天道ヶ尾式土器かどうかの確認はできていないが、徳島県山田遺跡からは天道ヶ尾式土器に類似する沈線文と刺突文をもつ土器が確認されている。類例がなく、前期初頭の可能性が指摘されるが断定できないという。山田遺跡は高さ5m幅3mの結晶片岩の岩陰遺跡であり、A・B・Cの3地点の調査が行われている。吉野川中流域池田町の吉野川南岸張り出した尾根の南西斜面標高150m付近に立地する。